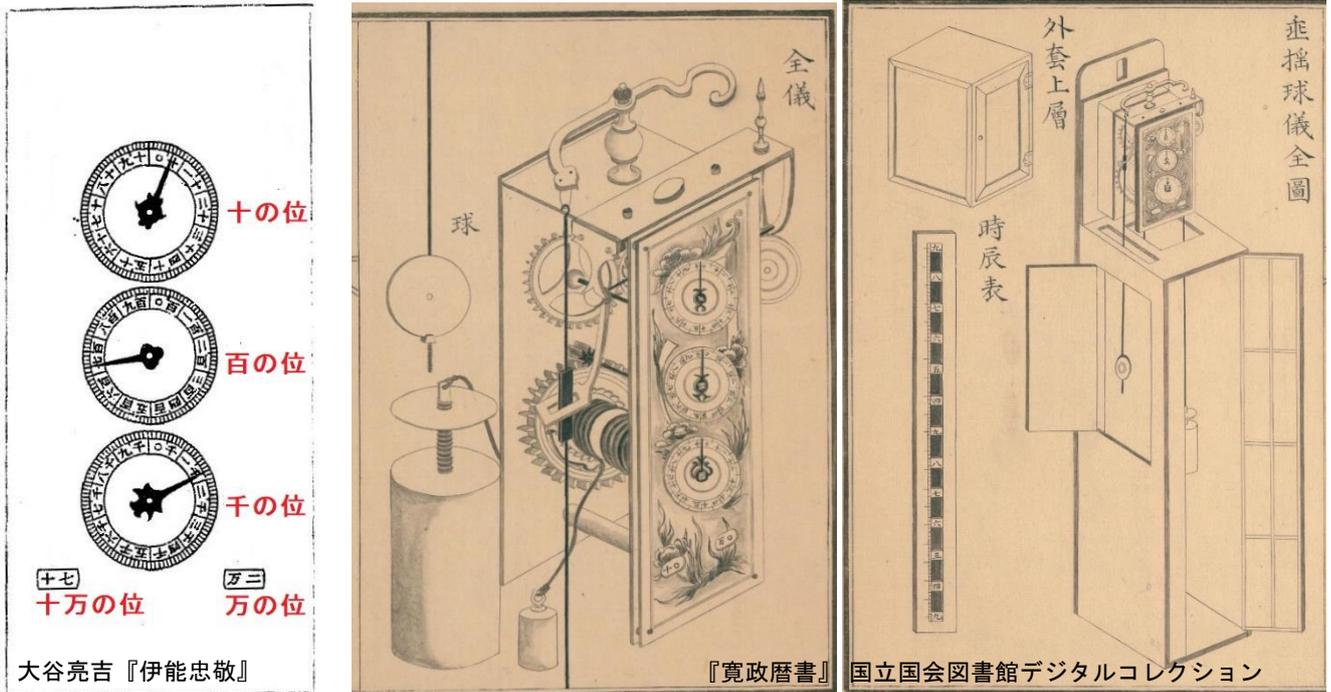


展示品一覧

○ 垂揺球儀 国宝：器具類 番号4

忠敬が使用した振り子時計である。本体は真鍮製で、盤面には草花文を線彫している。重錘は1940gで、約1.4秒で1回振り子が振れるとのことであるが、時刻を示すものではなく、振り子の振れた回数をカウントするものである。十の位、百の位、千の位の指針と右下の万の位と左下の十万の位の表示窓で、振り子の振れた回数を表示するものであり、1日に約5万9千回振動する。台座部には「寛政八丙辰歳／京都四條通烏丸住／戸田東三郎作」という貼紙があるとのことである。太陽の正中から翌日の正中までをカウントし、また、直前の太陽の正中から日食や月食の開始、終了までをカウントする。忠敬の垂揺球儀は盤面の草花文をふくめ、『寛政暦書』所収の暦局の垂揺球儀とほぼ同一かと思われる。



大谷亮吉『伊能忠敬』

『寛政暦書』

国立国会図書館デジタルコレクション

○ 匱絵図（高知県南西海岸 土佐清水市～大月町）

「土佐国幡多郡自清水浦至土佐国幡多郡泊浦匱絵図」 国宝：地図・絵図類 番号541

匱絵図の最初に「文化五戊辰六月五日、幡多郡自清水浦」とあるように、第6次測量の土佐清水の港から西側の海岸を描いたものである。測量隊は文化5年6月3日に足摺岬の宿坊を出立し、大風雨で測量も困難となり清水浦に到着した。翌4日は前日の残りなどを測量し清水浦に逗留。匱絵図は5日に清水浦を出立し17日に泊浦を経て小筑紫（小盡）浦に到着するまでの範囲を描いており、10メートルに及ぶ長さである。この匱絵図の作者は伊能忠敬の肖像を描いたことでも知られる青木勝次郎である。青木は絵の上手な御先手鉄砲組同心として天文方に出向し第6次測量に加わった。測量隊の案内をした土佐藩役人の奥宮正樹の『測量日記』（『会報』86号）には、青木について、絵を描く人で巻紙に行く先々に見える島・山・人家などを描いていると記している。伊能忠敬の『測量日記』の6月7日の記事には青木が船に乗り海岸を絵に描いた、17日には青木が絵を描くために別の船に乗ったと記載されているように、この匱絵図は船上からの海岸線を鳥瞰図として描いている。匱絵図は地図仕上げのための補助資料であることから、岬・浦・村などの名称や浦と浦との境界など様々な情報が詳細に注記されている。



地理院地図 色別標高図3Dに加筆

○ 参考絵図（大分県日出町）

「豊後国速見郡辻間村参考絵図」 国宝：地図・絵図類 番号763

忠敬が地図を作製する上での資料として提出を求めた村絵図で一ヶ村分のものである。他の村絵図と同様に道・山・田地等を色分けしているが、凡例が無く色分けの説明も、村役人たちの署名もない。村絵図の左下に「文化七年庚午二月 久留嶋伊豫守領分 豊後国速見郡 辻間村絵図

右絵図面之外日出御領分之内、田畑飛地所々有之」と注記されている。

辻間村は森藩久留嶋家の領地ではあるが、東の日出藩木下家の領地と接しているため、境界が入り組み飛地もあることからこのように注記している。

『測量日記』によると、文化7年2月8日に杵築城下に滞在中の忠敬ら測量隊に森藩久留嶋家から杉原紙5束などが贈られ、同時に森藩領内の村役人が挨拶に出向いている。その中には辻間村の庄屋松川淳左衛門もいるので、この折に村絵図を提出したのであろう。辻間村の測量は2月10日に行われた。



○ 特別地域図「天橋立 一町三分之図 一里当一尺八分」

国宝：地図・絵図類 番号115 文化4(1807)年12月 縮尺12,000分の1 65×80cm

特別地域図は大図、中図、小図とは異なる縮尺を用いた、観賞用、贈答用とされる華麗な地図であり、他に「琵琶湖図」と「安芸国厳島」が現存する。第5次測量を終えた文化4年に作成された。忠敬の「江戸日記」の文化4年3月1日には「厳島、天橋立、琵琶湖図持参暦局へ行く。夫れより桑原へ回り八ッ頃帰る」とあり、高橋景保や桑原隆朝に下見をしてもらった様である。3月29日には「厳島、天橋立、琵琶湖、浜名湖図持参浅草御役所へ行く」とあり最終的に提出している。「琵琶湖図」と「安芸国厳島」が広範囲を描き、また縦が104～109cm、横が126～137cmとサイズも大きいですが、この地図は天橋立だけを描いた名勝図というにふさわしく、サイズも65×80cmで殿様の床の間にぴったりである。

忠敬が天橋立を測量したのは文化3年9月5日～6日のことであった。大図の測線は標高328メートルに位置する成相寺にも伸びている。成相寺は天橋立を望む景勝地であり、西国巡礼第28番の札所である。



○ 大図（八丈島）

「伊豆国附八丈島并属小島沿海地図」

国宝：地図・絵図類 番号 116 文化 13 年 縮尺 12,000 分の 1 163cm×113cm



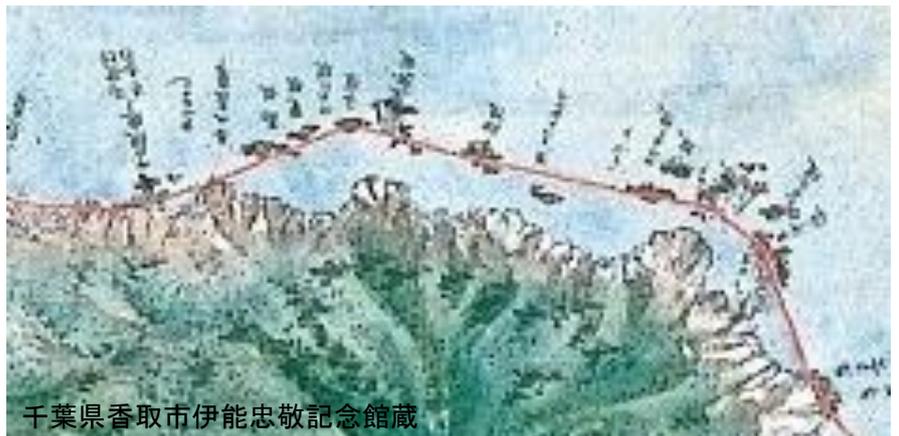
千葉県香取市伊能忠敬記念館蔵

八丈島の内部の未測量地まで山容を描き込んだ、華麗な 1/12,000 の特別大図である。この特別大図では山容の描写に様々な試みがなされている。八丈島本島の東山（三原山）は山並みが四方八方から鳥瞰図的に描かれており異様な迫力がある。西山（八丈富士）と八丈小島はこれまでの鳥瞰図的描写ではなく、真上から見たように描きながら、なお立体感をもって急峻な山容を描いている。

八丈島測量などの第 9 次測量では、高齢の忠敬は参加していない。文化 13 年 5 月 22 日の『測量日記』には、遙かに八丈島を見つけたので五里ばかり舟から狼煙を上げホラ貝を吹き島人に知らせた。迎え舟が引舟して湊に入り上陸した。その最初の感想は「可_レ恐絶海の孤島也」である。6 月 1 日には望遠鏡・象限儀・垂揺球儀などを据え付けて日食観測を行ったが「日食雲中に止む」という結果であった。八丈島測量を終え 6 月 29 日に三宅島に向かって出帆した。ところが黒潮に流されて「大洋之波濤、漂流」したあげく、三浦半島の三崎湊にたどり着いた。「都合四日三夜洋海に漂流す。可_レ恐、急潮の舟行也」と『測量日記』に記されている。

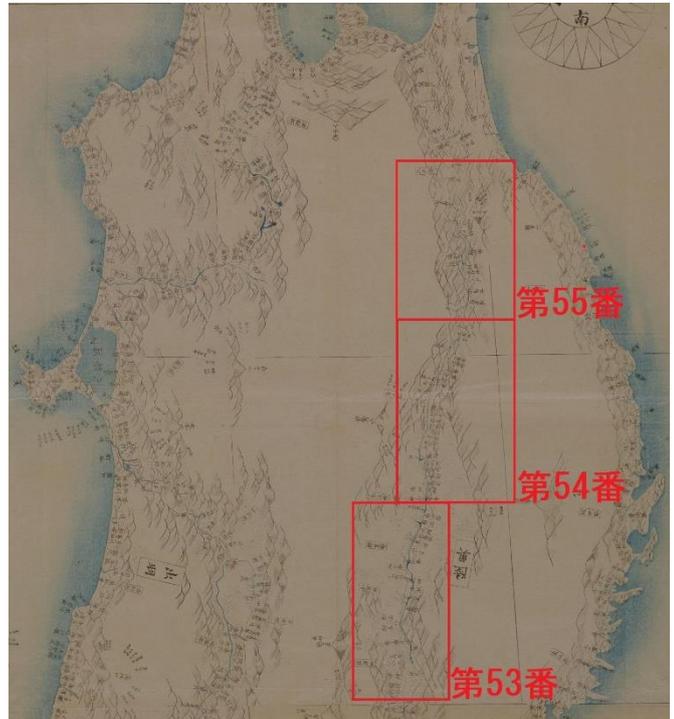
右の図では岩礁伝いに測線が延びていることがわかる。『測量日記』によると、「海岸大絶壁」のため「大浪舟測」を行ったと記している。

『会報』第 71 号に伊能楯雄顧問の「八丈島図を見ながら」に詳細に紹介されている。



千葉県香取市伊能忠敬記念館蔵

岩手県の奥州街道図が3舗展示されている。右の『官板実測日本地図(2)』(国立公文書館蔵)の赤枠がその範囲である。何れも第一次測量の往復、第二次測量の復路の成果である。



○ 大図(岩手県の奥州街道: 一戸・三戸・五戸)
「奥州街道図第十一(自御堂/至五戸)」

国宝: 地図・絵図類 番号55

文化1(1804)年 縮尺36,000分の1 84×175.5cm

「文化元年上呈小図」に付せられた「沿海地図凡例」には「南部野辺地より仙台迄は日々雪にて、量程車・間縄等相用不_レ申候に付、申年脚数を以て測り候ままにて図面へ出し申候」とあり、これらの大図の距離データは第1次測量の歩測によるものである。ところが『測量日記』では、五戸に到着した享和元年11月11日は「此日も雪不_レ降」、三戸に到着した12日は「朝より中晴」、一戸に到着した13日は「朝晴曇」とある。その後も仙台までの天気は雪もあるが晴れの日もあり、「日々雪」というわけでもない。『測量日記』によると、11月5日に「此日より宗平病氣、服薬成しむ」、10日には天候は「晴曇、雪不_レ降」であったが、「宗平病苦に付逗留」となった。病気の隊員平山宗平を看病しながらでは距離の測量までは手が回らなかったのであろう。

○ 大図(岩手県の奥州街道: 郡山・盛岡・沼宮内)
「奥州街道図第十(自郡山/至御堂)」

国宝: 地図・絵図類 番号54

文化1(1804)年 縮尺36,000分の1 88×174cm

11月15日に盛岡に到着すると、盛岡侯の家臣の徒士目付山口伝右衛門が藩主からの金子を届けに来た。御用先を理由に辞退したところ、山口から目録だけを受け取り、金子については盛岡藩の江戸の留守居役から幕府に届けたうえで進呈するとのアドバイスを受け、それに従った。幕府関係者の扱い方に慣れている。翌日は津軽産物を贈られ、「河漏」を振る舞われた。これは河漏麵のことで蕎麦切りを指す。

○ 大図(岩手県の奥州街道: 前沢・水沢・花巻・日詰)
「奥州街道図第九(自前沢/至郡山)」

国宝: 地図・絵図類 番号53

文化1(1804)年 縮尺36,000分の1 59×179cm

右のアメリカ大図第50号では、花巻から日詰までの奥州街道はほぼ直線である。11月まで展示されていた石川県南部の大図の、金沢から海岸に向かう真っ直ぐな測線を思い出した。現在の地図で確認すると、該当部分の国道4号線とその旧道はたどると大図のように直線であった。アメリカ大図では測線だけであるが、国宝の大図は測線の両側に並木が描かれており、単調な大図に彩りを添えている。

